



ベンヤミンとダーウィン：進化論について

著者	宇和川 雄
雑誌名	人文論究
巻	72
号	1
ページ	63-86
発行年	2022-05-20
URL	http://hdl.handle.net/10236/00030443

ベンヤミンとダーウィン

——進化論について——

宇和川 雄

1. はじめに——ダーウィン、ダーウィニズム、ベンヤミン

19世紀イギリスの自然科学者であるチャールズ・ダーウィン（1809-1882）と、20世紀ドイツの文芸批評家であるヴァルター・ベンヤミン（1892-1940）。生きた時代も専門領域も異なる二人には、ひとつの共通点がある。それが、「歴史」への関心である。ダーウィンは言わずと知れた「進化論（evolutionary theory）」の提唱者であり、それまで不変のものと考えられてきた生物種の可変性を明らかにした先駆者だった。1859年に発表された彼の『種の起源（*On the Origin of Species by Means of Natural Selection*）』は、「自然誌の時間化（*Verzeitlichung der Naturgeschichte*）」を——すなわち分類学的な「自然の記載」から系統学的な「自然の歴史」への移行を——決定づける一冊となった⁽¹⁾。一方でベンヤミンは、第二次世界大戦の勃発を機に書き

* 本論文は、2019年度 ASLE-Japan／文学・環境学会全国大会シンポジウム「ドイツとアメリカにおけるダーウィン受容の諸相：ダーウィンとダーウィニズムの距離」における口頭発表「ベンヤミンとダーウィン——進化論について」の原稿に加筆・修正を加えたものである。以下、ヴァルター・ベンヤミンのテキストの引用に関しては基本的に次の校訂版全集を使用し、略号 GS に巻数を記す。Benjamin, Walter: *Gesammelte Schriften*. Hg. von Rolf Tiedemann und Hermann Schweppenhäuser. Frankfurt a. M. 1991. ただし、一部の著作（『歴史の概念について』）に関しては次の新校訂版全集を使用し、略号 WuN に巻数を記す。Benjamin, Walter: *Werke und Nachlaß*. Frankfurt a. M. / Berlin 2008 ff.

(1) ヴォルフ・レペニースによれば、「自然の歴史（*Geschichte der Natur*）」という観念は、古典的な自然誌（*Naturgeschichte*）にとっては考えられない」ものであ

上げた『歴史の概念について (*Über den Begriff der Geschichte*)』(1940)のなかで、歴史とは何か、歴史をいかに語るのか、という問いに正面から向き合った人物だった。19世紀以降にかたちづくられてきた諸々の歴史の概念——例えば「進歩信仰」や「歴史主義」⁽²⁾——を解体し、新たな概念を構築することを自らの課題としていたベンヤミンは、では、はたして19世紀半ばに登場したダーウィンの進化論をどのようにとらえていたのか。それが本論文の起点となる問いである。

この問いに答えることは、容易ではない。というのも、ベンヤミンはその著作のなかではほとんどダーウィンの名前に言及していないからだ。少なくとも、ベンヤミンがダーウィンの『種の起源』を読んでいて、あるいはダーウィンの著作について論じていた、という事実はない。けれども、ベンヤミンのダーウィン理解を知るための手がかりはある。それが「ダーウィニズム」⁽³⁾である。『種の起源』の刊行以降、ハーバート・スペンサー(1820-1903)に代表される社会ダーウィニストたちは、ダーウィンが唱えた「自然淘汰(natural selection)」⁽⁴⁾の原理を人間社会における競争原理——優勝劣敗の原理——

↘ った。「自然誌」はそもそも非歴史的な、「自然界に属する物体の記録と叙述」を旨とするものであったが、19世紀初頭から、自然誌の叙述形式の「時間化」、あるいは歴史化が進む。Lepenies, Wolf: *Das Ende der Naturgeschichte. Wandel Kultureller Selbstverständlichkeiten in den Wissenschaften des 18. und 19. Jahrhunderts*. München / Wien 1978, S.30. ダーウィンの「ナチュラル・ヒストリー」が「自然の記載」と「自然の歴史」の双方を含意しながら、前者から後者への移行を決定づけるものであったことについては、以下の論考を併せて参照。三中信宏「ダーウィンとナチュラル・ヒストリー」[長谷川真理子、三中信宏、矢原徹一「現代によみがえるダーウィン」文一総合出版、1999年、153~212頁所収]。

- (2) ユルゲン・ハーバーマスは『近代の哲学的ディスクルス』のなかで、ベンヤミンが關った「歴史」の概念として、「進歩信仰」と「歴史主義」の二つを挙げている。ハーバーマスによれば、前者は「時間を均質で空虚なものとして表象」する立場であり、後者は「あらゆる尺度を相殺」し、「歴史を博物館のなかに閉じ込める」立場である。Habermas, Jürgen: *Der Philosophische Diskurs der Moderne*. Frankfurt a. M. 1993, S.20.
- (3) 本論文では以下、「ダーウィニズム」を主に「社会ダーウィニズム」の意味で用いる。
- (4) ダーウィンの用語 *natural selection* には「自然選択」と「自然淘汰」の二つの訳語があるが、松永俊男は「自然選択」の方が適切であると述べている。「現在の」

へと読み替えた。スペンサー流の社会進化論はその後 20 世紀に入ってからも影響力をもちつづけ⁽⁵⁾、やがてはナチスドイツの優生思想を支える礎のひとつとして利用されることにもなる⁽⁶⁾。そしてベンヤミンはナチスが台頭した 1920 年代から 30 年代にかけて、ダーウィニズムを批判し、反ダーウィニズ

-
- ㄨ 日本語の用法では、「淘汰」はもっぱら「悪いものを捨てる」意味で用いられ、「選択」は通常、「良いものを取る」意味で用いられている。[...] ダーウィンが 1844 年に執筆した学説の概要では、環境が変化したときにさまざまな変異体が生じ、そのうち新しい環境に最も適応したものが神によって選択され、子孫を残すとされる。人間による動植物の品種改良では、人間の目的にかなう変異体が選択され子孫を残すように、自然界では神の見えざる手によって環境に適応した変異体が選ばれる、というのである。「セレクション」は明らかに、「良いものを取る」意味である。[...] ダーウィンの意図を伝えるのであれば、訳語としては「自然選択」を用いるべきである。生物学者たちはなぜ、「自然淘汰」という誤訳を使うのだろうか。」松永俊男「日本におけるダーウィン理解の誤り」[[現代思想] 第 37 巻 5 号, 青土社, 2009 年, 48~52 頁所収], 51 頁参照。一方で、『種の起源』の翻訳者である渡辺政隆は、「自然淘汰」という訳語を選んだ理由を次のように述べている。『『種の起源』におけるキーワードのひとつであるナチュラル・セレクションの訳語については、「自然選択」ではなく、あえて「自然淘汰」を採用した。これは訳者の好みもあるが、生物の変異個体を篩にかけるという意味を強調したいという意図がある。そして選び取るという意味の「選択」については、随時「選抜」の語をあてた。これには、人為選抜とのアナロジーから自然淘汰を説くダーウィンの戦略を尊重する意味がある。』ダーウィン、チャールズ『種の起源(上)』渡辺政隆訳, 光文社, 2009 年, 7~8 頁参照。また、長谷川眞理子は **selection** を「選択」と訳すと、意味の異なる **choice** との訳し分けができず、使い方によっては文意が不明瞭となることを、「淘汰」の訳が選ばれる理由として挙げている。ダーウィン、チャールズ『人間の由来(上)』講談社, 2016 年, 12 頁参照。以上の指摘を踏まえ、本論文では以下 **selection** を「淘汰」と訳すこととする。
- (5) ホフスタターによれば、社会ダーウィニズムの展開は、19 世紀半ばから世紀転換期までの「個人主義」的段階と、世紀転換期から第一次世界大戦までの「帝国主義」的段階に分けられる。すなわち、ダーウィンの自然淘汰説は第一段階においては個人間の競争原理として、第二段階においては人種間・国家間の優勝劣敗の競争原理として解釈された。ホフスタター, R『アメリカの社会進化思想』後藤昭次訳, 研究社, 1973 年, 244~245 頁参照。
- (6) 優生学が社会ダーウィニズムから派生したことについては、長谷川, 三中, 矢原(1999), 58 頁を参照。社会ダーウィニズムの思想, すなわち「淘汰を通じて、人間社会がより高次な構造へ「進化」すると考えた [...] 思想を具体化した優生学は、「好ましい」と考えられる形質をもたらす遺伝子の増加もしくは「好ましくない」遺伝子の減少を目的とする研究をおこなった。当然「好ましい」「好ましくない」の判断基準は明確ではなく、人権侵害につながった多くの事例がある」。

ム的な歴史の概念の構築を目指した人物だった。そのため、ダーウィンの進化論から派生したダーウィニズムを批判することによって、ベンヤミンは間接的にダーウィンの進化論と接点をもっていたと、まずは指摘することができる。少なくとも彼自身は、ダーウィンとダーウィニズムの学説をひとくくりにして、みずからを「進化論的要素」に対抗する歴史家であると考えていた⁽⁷⁾。

ただし、このベンヤミンの自己理解にはひとつの問題がある。「進化論」と一口に言っても、ダーウィンのそれとダーウィニストのそれは決して同一ではない。ダーウィンの進化論がスペンサーのそれとは似て非なるものであること、後者の学説が前者の「誤解」にもとづいてつくりあげられたものであることは、つとに指摘されてきた⁽⁸⁾。ダーウィンとベンヤミンの歴史観は、つまり、どちらも〈ダーウィニズムとの差異〉を含んでいるという点では一致している。この一点に注目して、両者の思想を比較することは可能である。とはいえ、両者の〈ダーウィニズムとの差異〉がどの程度重なりを見せるのかという問いは残る。

この問いに答えるうえで重要な参照点となるのが、現代ドイツのダーウィン研究である。ドイツでは、ダーウィン生誕 200 年および『種の起源』刊行 150 年の節目にあたる 2009 年に先立って、人文科学の諸分野でダーウィンの進化論についての研究が急速に進んだ。なかでも注目すべきは、ホルスト・ブ

(7) GS 6, S.443.

(8) 渡辺政隆はスペンサーの「誤解」について、次のように述べている。「自然淘汰説には誤解がつきまどっている。社会進化論者スペンサーによる、自然淘汰の原理＝(最)適者生存(優勝劣敗)の原理という図式化などは、この最たるもので、科学哲学者ポパーは、これでは「適者は生存し、生存したものが適者だ」という同語反復的な言明にすぎず、科学的な仮説とはいえないと自然淘汰説を攻撃した。しかし、自然淘汰説とは、個体変異に自然環境がふるいをかけ、生存繁殖率の差をもたらすという理論であり、「適者」を定義するための言明ではない。この説で重要な点は、個体変異そのものに方向性はなく偶然(ランダム)であるということ、進化に方向性をもたせるのは環境変化すなわち自然だということなのである。したがって、環境変化が一定の方向を目指さない限り、進化もあらかじめ定められた方向に進んだりはない。」渡辺政隆「進化」[永井均他編『事典哲学の木』講談社、2002年、553～557頁所収]、554頁。

レーデカンプとヴィンフリート・メニングハウスの研究である⁽⁹⁾。ブレードカンプは『ダーウィンの珊瑚』のなかで、ダーウィンの進化論（自然淘汰説）の初期のモデルが「系統樹」ではなく「珊瑚」であったこと、また「珊瑚」というモデルが「社会ダーウィニズムによって矮小化された「適者」の目的論」⁽¹⁰⁾を否定するものであったことを明らかにしている。このダーウィンの「珊瑚」モデルは——ブレードカンプ自身はこの点について指摘していないが——ベンヤミンの歴史認識モデルと多くの共通点をもっている。また、ベンヤミン研究者でもあるメニングハウスは、ダーウィンの進化論の第二の柱である「性淘汰説」を美学理論として読み解いた『美の約束』のなかで、ダーウィンとベンヤミンの歴史研究に共通するテーマがあることを指摘している。これらの研究を通じて、ベンヤミンとダーウィンの共通点が徐々に明らかになってきてはいるものの、両者の関係を主題とした論考はいまだに書かれていない。そもそも、ベンヤミンが「進化論」をどのようにとらえていたのという点が、先行研究では十分に論じられていない。理由のひとつは、おそらく資料の少なさにある。すでに述べたように、ベンヤミンは著作のなかで、わずかな例外を除いて、ダーウィンについてほとんど言及していない。しかし、彼は「進化論」あるいは「自然淘汰説」については、断片的に触れている。本論文ではまず、それらの断片的な記述からベンヤミンの進化論批判の文脈を再構成したうえで、その批判のなかで練り上げられたベンヤミンの歴史の概念が、ダーウィンの進化論といかなる共通点をもっているのかを、現代ドイツのダーウィン研究

(9) Vgl. Bredekamp, Horst: *Darwins Korallen. Frühe Evolutionsmodelle und die Tradition der Naturgeschichte*. Berlin 2005; Menninghaus, Winfried: *Das Versprechen der Schönheit*. Frankfurt a. M. 2003. この他に、ブレードカンプが「ダーウィンの図像世界についての美術史・科学史の観点からみた最初の総合的な分析」(Bredekamp 2005, S.7 f.)と評価するユーリア・フォスの研究が挙げられる。Vgl. Voss, Julia: *Darwins Diagramme—Bilder von der Entdeckung der Unordnung*. Berlin 2003; Dies: *Darwins Bilder*. Frankfurt a. M. 2007. フォスはまた、ダーウィンの『ビーグル号航海記』がミヒャエル・エンデの『ジム・ボタンと機関士ルーカス』に与えた影響についても論じている。Vgl. Voss, Julia: *Darwins Jim Knopf*. Frankfurt a. M. 2009.

(10) Bredekamp 2005, S.78.

を手がかりにして考察する。

2. ベンヤミンの進化論批判

ベンヤミンの進化論批判を確認する前に、まずはベンヤミンがその生涯を通じてどのように「歴史」に関心を寄せていたのかを概観しておこう。

ベンヤミンはすでに学生時代から、歴史に対して強い関心を抱いていた。ベンヤミンは1919年に博士論文『ドイツロマン主義における芸術批評の概念 (*Der Begriff der Kunstkritik in der deutschen Romantik*)』を完成させるが、当初の計画ではそれは「メシアニズム」——つまり歴史における救済の時——を主題とした論文となるはずだった⁽¹¹⁾。つづいてベンヤミンは1925年に教授資格申請論文『ドイツ悲劇の根源 (*Ursprung des deutschen Trauerspiels*)』を書き上げるが、これはドイツバロック悲劇の分析を通じて、17世紀の歴史を描写する試みであった。この17世紀研究と対をなすものが、19世紀研究の一大プロジェクト『パサージュ論 (*Das Passagen-Werk*)』である。1927年からはじまったこの研究は、1930年代に入ってから断続的につづけられるが、1940年のベンヤミンの自死をもって未完に終わる。その死の直前に書き上げられたのが『歴史の概念について』であり、この短いエッセイのなかでベンヤミンは自らの歴史学の方法と課題を簡潔に素描している。

このように、ベンヤミンは1910年代から1940年まで、生涯にわたって歴史に強い関心を抱いていた。では、ベンヤミンは歴史をどのような観点からとらえていたのか。今村仁司は、その観点を「個物の救済」という言葉で要約している⁽¹²⁾。「個物の救済」とは、もともと『ドイツ悲劇の根源』に由来する言葉であるが、体系の構築ではなく個物の救済へと向かう彼の志向は、他の著作

(11) 拙論「ヴァルター・ベンヤミンにおける普遍史の理念」[関西学院大学人文学会『人文論究』第68巻第1号、2018年、229～257頁所収] 243～244頁参照。

(12) 今村仁司「個物の救済——ベンヤミンと林達夫」[同『現代思想の系譜学』筑摩書房、1986年、157～166頁所収] 参照。

においても一貫している。例えば1933年のエッセイのなかで、ベンヤミンは「大なる全体」の把握ではなく、文献学的な「些末なものへの畏敬心 (An-dacht zum Unbedeutenden)」こそが、新しい歴史学の課題であると述べている⁽¹³⁾。あるいは『パサーージュ論』のなかでは、「モンタージュの原理 (Prinzip der Montage)」を歴史学へと新たに導入することが提唱されている⁽¹⁴⁾。モンタージュとは、ベンヤミンによれば、「鋭利に裁断された大量生産の極小部品の組み合わせから大きな構築物をつくりだし」、「小さな個別要素の分析において出来事全体の結晶を見出す」方法であり⁽¹⁵⁾、それはさらに別の断章のなかでは次のように言い換えられている。

この仕事の方法は、文学的モンタージュである。私が語ることなにもない。ただ見せるだけだ。高価なものを盗むことは一切なく、気の利いた言い回しを自分のものにするものもない。だが、ボロ、屑——それらの目録を作りたいのではなく、ただ唯一可能なやり方でそれらに正当な位置を与えたいのだ。⁽¹⁶⁾

このように、ベンヤミンは「歴史の屑 (Abfall der Geschichte)」⁽¹⁷⁾を収集し、それらに「正当な位置」を与えることが、みずからの方法であると考えていた。しかし1930年代以降、彼の関心は次第に文化史から人類史へ、つまり〈モノ〉から〈人間〉へと移ってゆく。その移行は、遺作となった『歴史の概念について』のなかにはっきりと見てとれる。『歴史の概念について』のなか

-
- (13) 「些末なものへの畏敬心」という言葉を、ベンヤミンは1933年のエッセイ「厳密なる芸術学」のなかで使っている。GS 3, S.371. ベンヤミンがこの言葉を文献学・歴史学の標語として使っていたことについては、拙論「文献学と歴史——グリムからベンヤミンへ」[日本独文学会『ドイツ文学』第146号, 2013年, 119~132頁所収]を参照。
- (14) GS 5, S.575. 『パサーージュ論』断章 2, 6より。
- (15) Ebd.
- (16) Ebd., S.574. 『パサーージュ論』断章 1 a, 7より。
- (17) Ebd., S.575. 『パサーージュ論』断章 2, 6より。

で、ベンヤミンは「歴史の屑」の「モンタージュ」の作業を、「抑圧された者たち（die Unterdrückten）」の追悼的な「想起（Eingedenken）」の作業としてとらえなおしている。あるメモのなかで、ベンヤミンは自らの課題を次のように記している。「歴史学の課題とは、抑圧された者たちの伝統を手に入れるだけではなく、それを創設することでもあるのだ。」⁽¹⁸⁾それはすなわち、「抑圧する者たち」の歴史の影に隠れた「抑圧された者たち」の歴史の想起、あるいは〈勝者の歴史〉の影に隠れた〈敗者の歴史〉の想起の作業にほかならない。そしてこの課題は、1940年当時のベンヤミンにとっては、きわめてアクチュアルなものだった。なぜなら、彼自身がこのとき「亡命ユダヤ人」として、「抑圧された者たちの伝統」に名を連ねていたからだ。

では、ここで批判の矛先が向けられている、〈勝者の歴史〉とは何か。ベンヤミンはその代表例として、「進歩主義」を挙げている。ベンヤミンの考えでは、進歩主義者は、人類の歴史を輝かしい発展の連続として見ている。しかしそれは、彼らが歴史のいわば勝ち組であるからそう見えるのであって、敗者の目から見れば、歴史とは破局の連続にほかならない。この点についてベンヤミンは、「破局とは進歩であり、進歩とは破局である」⁽¹⁹⁾という謎かけのようなメモを残しているが、これは要するに、「破局とは〔勝者の目から見れば〕進歩であり、進歩とは〔敗者の目から見れば〕破局である」という意味に解釈できる。

ベンヤミンはこのように、進歩主義という名の〈勝者の歴史〉を批判して、その影に隠れた〈敗者の歴史〉の救済を目指していた。では、本題に戻ると、ベンヤミンの進歩主義批判は、進化論とどのように関係するのか。そもそも、「進歩（Fortschritt）」と「進化（Evolution）」は概念として同じものなのだろうか。この点について、ベンヤミンは『パサーージュ論』のなかで次のように説明している。

(18) WuN 19, S.138.

(19) Ebd., S.133.

進歩 (**Fortschritt**) の概念は、19 世紀においてブルジョワ階級が権力を掌握してから、本来それに備わっていたはずの批判的な機能をどんどん失っていったのだろう。(自然淘汰説 (**Die Lehre von der natürlichen Zuchtwahl**) はこの過程で決定的な意義をもっていた。この理論において、進歩は自動的に遂行されるという考え方が強まった。この過程はさらに、人間活動の全領域に進歩概念を適応することを容易にした。)⁽²⁰⁾

ベンヤミンはここで、進化論 (自然淘汰説) が 19 世紀後半以降の「進歩主義」の広がりにおいて重要な役割を担っていたことを指摘している。ベンヤミンの理解では、「進歩」の概念は、それがそもそもフランス啓蒙主義のなかで生まれたときには、旧体制を打破して社会の変革を目指す「批判的な機能」をもっていた。しかし、19 世紀以降、「進歩」は歴史の必然と考えられるようになり、台頭してきたブルジョワ階級が自分たちの歩みを正当化するための方便となり、その言葉がそもそももっていた社会批判的な機能は失われていった。そしてその傾向に拍車をかけたのが、「自然淘汰説」、つまりダーウィンおよびダーウィニズムの進化論の登場だった。

社会ダーウィニズムの登場によって、生物種が「進化」するように社会も「進歩」することが、次第に自明の理として考えられるようになったという指摘は、たしかにその通りである⁽²¹⁾。ただし、ベンヤミンが述べていないことを一点補足しておく、もともと社会批判的な機能を含みもっていたのは、進歩思想だけではなく、進化論もそうだった。スーザン・バック＝モースは、ダーウィンの進化論の「批判性」が、社会ダーウィニズムの登場以降に失われていった経緯を、次のように説明している。「19 世紀に社会ダーウィニズムは

(20) GS 5, S.596. 『パサーージュ論』断章 N 11 a, 1 より。

(21) 渡辺は、「進化」を「進歩」とみなす誤解が広まった理由として、ダーウィニズムの影響を指摘している。「社会進化論を唱えるスペンサーは、適応＝進歩という誤った大前提のもとに、自然淘汰説の目的論的に見える側だけを強調した。ダーウィン進化論の普及に努めたドイツの動物学者ヘッケルもまた、観念論に走って前進的な進化のみを強調し、進化＝進歩という偏見を強化した。」渡辺 (2002), 556 頁。

ダーウィンの自然史の用語を「社会進化」に適應した。もともとダーウィンの理論は、神学的神話や聖書のドグマに挑み、科学的で実証的な観点から歴史を理解することをも含めて、批判的衝動をもっていた。ところが、社会進化論においてはそのような批判性は失われてしまっている。結果として、社会「進化」という考えは、人間の歴史がたどった盲目的で経験的な進路を賛美した。それは、競争資本主義は真の人間の「自然」が現れたものであり、帝国主義的競争は避けることのできない生存競争の健全な結果であり、優勢な「人種」は「自然」の優越性であると主張することによって、社会の現状維持に対するイデオロギー的な擁護となった。」⁽²²⁾

ベンヤミンは1921年の論考のなかで、ダーウィンと社会ダーウィニズムをひとくくりにして、彼らの学説に内在する暴力性について次のように述べている。

ダーウィンの生物学はまったくドグマ的なやり方で、自然淘汰 (*die natürliche Zuchtwahl*) とならんで暴力 (*Gewalt*) のみを、自然のあらゆる生命の目的に唯一かなう根源的な手段であるとみなしている。ダーウィニズム的な通俗哲学 (*Die darwinistische Popularphilosophie*) によく見られることだが、こういった自然権のドグマから、ほとんど自然的な目的だけにかなう暴力はそれだけですでに合法的であるとする、さらに粗雑な法哲学のドグマまでは、ほんの一步でしかない。⁽²³⁾

ベンヤミンのダーウィニズム批判は、さらに1929年に書かれたエッセイ「ダーウィニズムの危機? (*Krisis des Darwinismus?*)」のなかにも確認できる。ベンヤミンはそのなかで、「公認のダーウィニズム」⁽²⁴⁾に戦いを挑んだ人

⁽²²⁾ Buck = Morss, Susan : *The Dialectics of Seeing. Walter Benjamin and the Arcade Project*. London 1991, S.58.

⁽²³⁾ GS 2, S.180.『暴力批判論』(1921)より。

⁽²⁴⁾ GS 4, S.536.

物として、古代生物学者のエドガー・ダケー（1878-1945）を紹介している。ベンヤミンが興味をもったのは、この人物が「系統樹（Stammbaum）」を信じていない点だった。歴史を「樹木」ではなく、複雑に絡み合う「系統の藪（Stammgesträuchen）」⁽²⁵⁾としてとらえるダケーの考え方に、ベンヤミンは共感を示している。

ではベンヤミン自身は、歴史をどのようなモデルにおいて考えていたのか。1931年の日記のなかで、ベンヤミンは進化論が「発展（Entwicklung）」を「河（Fluß）」のモデルで考えていることを批判している⁽²⁶⁾。「河」は高いところから低いところへと流れ、その逆は起こりえない。一点補足をしておくと、ここで想定されているのは、スペンサーやラマルクが唱えたような「定向進化」——つまり一定の方向性をもった進化——の考え方である。もちろん、スペンサーやラマルクが考えていたのは〈低いものから高いものへの進化〉であるため、「河」とは流れる方向が逆ではあるものの、それでも「河」という比喩は、「定向進化」の特徴を的確に言い当てている。だが、ベンヤミンにとって歴史は整然と流れる「河」ではなかった。なぜなら、彼は歴史を「屑」や「ボロ」が無秩序に堆積する、巨大な集積場のようなものとして考えていたからだ。その状態をとらえるために、「河」の代わりに彼が提唱するのが、「渦（Strudel）」の比喩である。

(25) 鯨と魚のように、異なる系統に属する種が形態上の類似性をもつことに注目して、系統を超えた種の親縁性を唱えるダケーの説を、ベンヤミンは次のように解説している。「この講演者〔ダケー〕は、「系統樹」というものを信じない。これまでくりかえし見出されてきたのは、特定の動物グループ内での系統発生学的親縁性だけだった。彼は次のような見解に傾いていると思われる。——自然は突然変異的にふるまうのであって、いくつかの特定の動物形態を試してみる一連の試行のあと、突然に方向を変え、外見的には同じように見えるより高次の、すくなくともより洗練された生命組織をもった、より環境に適合した形態をとりはじめるのであり、しかもその際、試行形態と変異体の形態とのあいだに系統上の関係はない。彼は、いかなる系統樹（Stammbaum）も見出さず、ただ系統の藪（Stammgesträuchen）ばかりを見出すのだ。」Ebd., S.535.

(26) GS 6, S.442 f.

私は発展 (*Entwicklung*) の概念が根源 (*Ursprung*) の概念によって完全に押しつけられてしまうような、歴史の考え方を表現しようと試みた。〈歴史的なもの〉は、わたしの理解では、もはや発展の流れという河床 (*Flußbett*) のなかには探し求めることはできない。すでに別のところで述べたように、この考え方においては河床のイメージに代わって、渦 (*Strudel*) のイメージが登場する。そのような渦のなかで、ある出来事のあるいはより正確に言えばある状態の——前と後が、つまりそれ以前の歴史とそれ以後の歴史が、ぐるぐると旋回しているのだ。そのような歴史観の本来の対象とは、したがって特定の事件 (*bestimmte Ereignisse*) ではなく、概念的もしくは感覚的なあり方をした特定の不変の状態 (*bestimmte unwandelbare status*) である。——つまり、ロシアの農業法、バルセロナという都市、マルク・ブランデンブルクにおける人口推移、ドーム型天井といったものである。この見方を規定しているのはつまり、歴史における進化論的・普遍的要素 (*das evolutionistische und universale Element*) の可能性に断固として反対を表明する態度なのである。⁽²⁷⁾

ベンヤミンはここで、E・A・ポーの『メールシュトレームにのまれて』(1841) に描かれているような、すべてのものを飲み込んで混然一体となって旋回する「渦」の比喩で、歴史をとらえている⁽²⁸⁾。では、歴史が渦を描いて旋回する、とはどういうことなのか。渦は螺旋状の旋回運動であり、そこには中心が存在する。その中心にあたるものは、例えばフランス革命のような「特定の事件 (*bestimmte Ereignisse*)」ではない。渦の中心にあるのは、概念的かつ具体的な、「特定の不変の状態 (*bestimmte unwandelbare status*)」であるとベンヤミンは言う。ベンヤミンは上の引用では、特定の都市 (バルセロ

⁽²⁷⁾ Ebd. 強調はベンヤミンによる。

⁽²⁸⁾ ベンヤミンは1925年の『ドイツ悲劇の根源』の「認識批判的序章」のなかで、「渦」のイメージに言及している。GS 1, S.126. また、アドルノは『ドイツ悲劇の根源』へのオマージュとして書いた『キルケゴール』(1933)のなかで、ポーの『メールシュトレームにのまれて』をエピソードとして引用している。

ナ) や特定の建築様式 (ドーム型天井) をその例に挙げているが、彼自身が実際に歴史研究の対象としていたのは「パリのパサージュ」だった。パサージュ, すなわち「19世紀半ばに出現し、数々の店舗やカフェに縁どられ、いつしかメトロポリスの象徴ともなった路地」(G・ショーレム)⁽²⁹⁾を、ベンヤミンは19世紀の渦の中心として考えていた。なぜなら、パサージュのなかには、商品経済、近代建築、科学技術、社会運動、都市計画、ファッション、売春、遊歩といった、19世紀のさまざまな主題が巻き込まれているからだ。ベンヤミンはそれらの主題を36の項目に分類し⁽³⁰⁾、新聞や雑誌の片隅から資料を収集し、それらの再配置 (モンタージュ) によって、歴史の渦を描き出そうとした。しかし、この企画は結局未完に終わり、ベンヤミンは最後に『歴史の概念について』のなかで、瓦礫に埋もれた〈敗者の歴史〉の発掘と想起を、今後の課題として書き残すことになる。『パサージュ論』から『歴史の概念について』にかけて、ベンヤミンの課題にはいくらか変化がみられるものの、進歩主義との、あるいは進化論との対決姿勢は、変わることなく一貫している。「渦」の比喩にもとづく、「歴史の屑」の「モンタージュ」。このベンヤミンの方法は、まさにこの対決を通じて練り上げられたものだった。

3. ベンヤミンとダーウィン

——現代ドイツのダーウィン論を手がかりに

前章ではベンヤミンの進化論批判を確認したが、本章ではダーウィンとベンヤミンの歴史研究の共通点を探る。その手がかりとなるのが、2000年代に発表された二つのダーウィン研究——ホルスト・ブレーデ坎プの『ダーウィンの珊瑚』とヴィンフリート・メニングハウスの『美の約束』——である。両研

(29) Scholem, Gerschom : *Walter Benjamin*. In : Ders. : *Judaica*. 2. Frankfurt a. M. 1970, S.193-227, hier S.216.

(30) 『パサージュ論』は、大文字のアルファベット (A~Z) の26項目、および小文字のアルファベット10項目の「覚書と資料 (Aufzeichnungen und Materialien)」によって構成されている。

究は、ダーウィンの進化論の非ダーウィニズム的な側面を強調する点で基本的に一致している。もっとも、ダーウィンの進化論を、ダーウィニズムから区別することによって再評価する試みは、これまでもくりかえしおこなわれてきた。すでに前章で確認したように、社会ダーウィニズムはダーウィンの唱える進化を「定向進化」ととらえて、進化論を人間社会の「進歩」の理論へと読み替えた。しかし、ダーウィン自身には「定向進化」の考えがなかったということは、いまでは定説となっている⁽³¹⁾。ブレーデカンブとメニングハウスの研究においてもまた、ダーウィンの進化論が目的論的なものではないこと、種の変異の多様性を探求したものであることが、それぞれ独自の観点から明らかにされている。ブレーデカンブは図像学の観点から、『種の起源』の構想段階に描かれた「珊瑚」のスケッチに注目し⁽³²⁾、ダーウィンの進化論が「あらゆる秩序のイメージに逆らう無秩序状態のなかに現れた自然の可変性 (Variabilität der Natur)」⁽³³⁾を探求したものであることを指摘している。他方でメニングハウスはダーウィンの進化論の第二の柱である性淘汰説を取りあげて、それが多様性と新奇性を志向する「美」の理論であることを明らかにしている。では、これらの研究を踏まえたうえで、ダーウィンの進化論とベンヤミンの歴史研究の共通点はどのように指摘できるだろうか。

まずはブレーデカンブの研究から見ていこう。ダーウィンの「系統樹 (Stammbaum)」のモデルは、「樹木 (Baum)」ではなく「珊瑚 (Koralle)」であった。——結論を先取りして言えば、これがブレーデカンブのテーゼであ

-
- (31) ダーウィンの考えでは、生物の変異は偶然に起こり、変異した個体が生き残るかどうかを決めるのは自然環境である。しかし自然環境もまた不変のものではなく、刻々と移ろいゆくものであり、その変化を予測して生物が変異をすることはできない。そのため、種が一定の方向に向かって進化することは——環境の変化が一定の方向を向かない限り、あるいは人為淘汰が介在しない限り——ありえない。ダーウィンの進化論が定向進化の理論ではないことについては、長谷川、三中、矢原(1999)、14頁、および渡辺(2002)、554頁を参照。
- (32) ブレーデカンブが進化論の「テキスト」のみならず「スケッチ」にも注目するのは、「思考の運動は通常言語よりもスケッチをする手の動きなかに先にあらわれる」という図像学者の確信ゆえである。Bredekamp 2005, S.11.
- (33) Ebd., S.78.

る。ではなぜ、ダーウィンは「珊瑚」を進化論のモデルとして選んだのか。ブレイデカンブによれば、そもそもヨーロッパにおいては中世以来、家系図や社会のヒエラルキーを表すモデルとして、しばしば「生命樹」のモデルが使われてきた⁽³⁴⁾。しかしこの「樹木」のモデルには、「成長の方向性が変更できない」⁽³⁵⁾という大きな問題点があった。どういうことかということ、樹木は基本的に上に向かって成長し、枝は大きなものから小さなものへと分岐し、その逆は基本的には起こりえない。しかしダーウィンは生物種の成長の方向性が一定ではないことをよく知っていた。例えば生物の生息領域に限ってみても、空を飛ぶようになった鳥類のうち、ペンギンのように飛ぶ機能を失い、海に戻るものがある。水中・地上・空中という領域を越境する生物種の進化のこうした錯綜した動きを表すためには、「樹木」はふさわしくない⁽³⁶⁾。そこでダーウィンが選んだモデルが、「珊瑚」だった。ブレイデカンブは、「樹木は良い比喻ではない」、あるいは「生命の樹木は生命の珊瑚と呼ばれるかもしれない」⁽³⁷⁾という初期ダーウィンのメモに注目して、『種の起源』のなかに描かれた「系統樹」のモデルの再検証を試みている。

「珊瑚」と「樹木」の一番の違いは、ブレイデカンブによれば、枝分かれの仕方にある。「樹木」の場合、枝はいったん分かれてしまうと、再びひとつに戻ることはない。しかし「珊瑚」の場合、「大枝や小枝はいったん分離した後でもまた、まったく新しい合一体をつくる」ことができる⁽³⁸⁾。ダーウィンのスケッチのなかでは、実際、進化の枝分かかれは「樹木」というよりもむしろ枝同士の絡み合う「藪 (Busch)」のような——あるいは「珊瑚」のような——形状で描かれている⁽³⁹⁾。ブレイデカンブはこの点に注目して、「ヒエラルキー

(34) Ebd., S.12 f.

(35) Ebd., S.18.

(36) Ebd., S.20.

(37) Ebd., S.20, 78.

(38) Ebd., S.21. ブレイデカンブは樹木モデルの問題点を次のようにも指摘している。「上向きにのびる樹木には、増えていく分化が稍をますます広がらせ、それによって、最初は近い関係にあると定義された下のほうの横枝が、途方もなく大きな間隔で引き離されるという問題点が必ず残る」。Ebd., S.74 f.

(39) Ebd., S.21.

的に方向づけられた樹木よりも、可変的な動きの方向性を許容するような視点の転換⁽⁴⁰⁾が、そこで起こっていたことを指摘している。かくして、「ダーウィンの珊瑚のモデルの分枝は上に向かって動くだけではなく、地図をつくるようにあらゆる方向へ増殖する」⁽⁴¹⁾。それは一見すると、ドゥルーズ／ガタリ的な「リゾーム」——地下茎——のモデルに似ているが、それ以上のモデルであるとブレードカンブは言う。なぜなら、「リゾーム」もまた「珊瑚」と同じく「樹木」に対抗するモデルではあるが⁽⁴²⁾、「リゾーム」がただ無秩序に分散していくだけであるのに対して、「珊瑚」は無秩序な生物進化のなかに現れる「偶然性」のみならず、「法則性」をも表象しているからだ⁽⁴³⁾。

アンピロア・オルビグニユアナ〔ダーウィンがスケッチをとっていた珊瑚の一種〕のような物体は、樹木と系図学への反感をリゾームと共有するが、網・藪・珊瑚・海藻といった自然モデルはリゾームと違って、ラディカルさにおいてその後二度と到達されることがなかったほどの範例をかたちづくっている。それらは、あらゆる秩序のイメージに逆らう無秩序状態

(40) Ebd., S.27.

(41) Ebd.

(42) ブレードカンブはこの点について『資本主義と分裂症』を参照しているが、ドゥルーズ／ガタリはそのなかで「リゾーム」と「樹木」モデルの対立関係について、次のように述べている。「リゾーム状になるということは、根のように見える茎や繊維を産み出すこと、いやそれよりも幹に侵入してそれらの根と連結され、それらを奇妙で新たな用途に役立てることも辞さない茎や繊維を産み出すということである。われわれは樹木に倦み疲れている。われわれはもはや樹木や根を、また側根をも信ずるべきではない。そうしたものを我慢しすぎてきたのだ。」ドゥルーズ、ジル／ガタリ、フェリックス『千のプラトーン（上）資本主義と分裂症』宇野邦一他訳、河出文庫、2010年、40頁。

(43) ブレードカンブはこの点について次のように述べている。「ダーウィンはほとんど無限に分散する豊かな形のなかに、〔生物進化における〕法則性と偶然性という二重の規定が作用していることを見抜いており、珊瑚はこの二重の規定に対応していた。珊瑚は生きている勝者と石灰化した死者の闘争の図として、進化のイメージをとくに具体的に伝えることができただけでなく、その成長の形式においても発展の無秩序な側面を代表しており、この点において自然模倣的な樹木のモデルの理解とは相いれないものだった。」Bredekamp 2005, S.28. なお、〔〕内の文言は論者による補足。

のなかに現れた自然の可変性 (Variabilität der Natur) の探求を表象している。この無秩序状態は上昇や目的設定という基準に従うことはない。このことは、社会ダーウィニズムによって矮小化された「適者」の目的論も、またある計画が根底に存在するという創造論の確信も否定する。(44)

ブレーデカンフによれば、「珊瑚」は無秩序に枝分かれする「自然の可変性」をとらえるために選ばれたモデルであり、それは「社会ダーウィニズムによって矮小化された「適者」の目的論」とも、すべての種が神によって創造されたと考える「創造論」とも相容れないものだった。この点を踏まえると、ここでまず一点目のダーウィンとベンヤミンの共通点が指摘できるだろう。ダーウィンが「系統樹」に代わる「珊瑚」のモデルを追い求めたように、ベンヤミンもまた「河」に代わる「渦」のモデルを追い求めた。ダーウィンがダーウィニズム以前に、「珊瑚」というモデルで生物種の進化の動きの多様性をとらえようとしていたとすれば、ベンヤミンはダーウィニズム以降に、「渦」というモデルでさまざま種類の「歴史の屑」が混然一体となって旋回する歴史の運動をとらえようとしていたのである。

しかし、両者の共通点は、たんにモデル選択の類似性だけにはとどまらない。ヴィンフリート・メニングハウスは『美の約束』のなかで、ダーウィンの進化論の第二の柱である性淘汰説を取りあげて、ダーウィンとベンヤミンの歴史研究には共通するテーマがあることを指摘している。性淘汰説について説明を捕捉すると、ダーウィンはすでに『種の起源』の段階で、自然淘汰説だけでは生物の進化を説明できないことに気がついていた。それが、生物の雌雄の個体差の問題である。例えば、シカやクジャクがどのようにして現在の種の形になったのかという問いには、自然淘汰説で答えられるが、なぜ同じ種の雄と雌のあいだに大きな個体差があるのか、なぜシカの雄には角があって雌にはないのか、なぜクジャクの雌雄では羽の模様が違うのかという問いには答えられな

(44) Ebd., S.78. なお、[] 内の文言は論者による補足。

い。生存競争のうえでは必要のない、むしろ天敵に見つかる危険を高めることにもなりうる装飾が、なぜ生まれたのか。この問いに対する答えとしてダーウィンが用意したのが、雌による「美的選好」によって装飾をもった雄が選ばれてきたという、性淘汰説である⁽⁴⁵⁾。

ダーウィンはこの性淘汰が起こるメカニズムを、1871年の『人間の由来と性淘汰 (*The Descent of Man, and Selection in Relation to Sex*)』のなかで詳細に論じている。メニングハウスの『美の約束』は、このダーウィンの第二の主著を第一級の美学書として読み解く野心的な試みであった。なぜそのような読み方が可能なのかというと、性淘汰とはすなわち異性による「美的選好」の理論であり、それは美とは何か、ひとはなぜ美しいものを好むのかという美学の根本問題に直結しているからだ。もっとも、人間の場合、生物とは違って、「美的選好」は生身の身体にのみかかわる話ではない。相手がどのような装いをしているのか、どのような本を読み、どのような音楽を聴いているのかということも、その選択にはかかわってくる⁽⁴⁶⁾。鳥の美しい羽根のような、生物の身体に備わった「ファッション (fashion / Mode)」が、ダーウィンが主張するように美的淘汰のメカニズムのなかで進化してきたのであれば、「装身具・衣服・インテリア・建築」⁽⁴⁷⁾といった人間の「文化的ファッション」

(45) ダーウィンによれば、性淘汰には二つの種類がある。ひとつは雄同士の戦いであり、例えばシカの場合、戦いに勝った雄の個体が雌との配偶の機会を得るが、大きな角を持っていることが戦いにおいては有利に働く。シカの雄の角が大きいのはそのためであると考えられる。もうひとつは雌による美的選好であり、例えばクジャクの雄には、雌にはない美しい飾り羽があるが、これは雌の個体が雄をその羽根模様に注目して選んでいるためであると考えられる。ダーウィンの性淘汰説の概要については、メニングハウスの『美の約束』と併せて、長谷川眞理子「ダーウィンの性淘汰の理論とヒトの本性」[長谷川、三中、矢原(1999)、213～258頁所収]を参照した。

(46) 人間と生物の美的選好の違いについて、メニングハウスは次のように述べている。「人間における美的選好は、明らかにすでに以前から性的身体に限定されたものではない。美的選好はむしろ付加的に、多くの文化的事象による記号的コミュニケーションの諸形式をも制御する。装身具、衣服、インテリア、そして建築において、人間は性的なものとなった対象との配偶を果たす。」Menninghaus 2003, S.222.

(47) Ebd.

もまた、同じメカニズムのなかで進化してきたのではないか。これがメンシングハウスの着眼点であり、彼は生物と人間の「ファッション」に共通する特徴を次のように述べている。「美的な性淘汰によって自然の身体に刻印された「ファッション」は、文化的ファッションと以下の六つの特徴を共有する。それは、原理的な恣意性、合理的な動因からは推論不可能な気まぐれ、急速な創発（少なくとも自然淘汰にもとづく変異との比較において）、（一見すると）無駄であるにもかかわらず費やすものが多いこと、「新奇性」の優遇（新しいもの好き）と多様性へと向かう傾向、そしてしばしば形式が正反対の方向へと折り返すことである。」⁽⁴⁸⁾

メンシングハウスはこのように、ダーウィンが「ファッション」のなかに見出した生物の進化の原理を、文化の進化の原理へと読み替える。進化が「美的選好」によって起こるのだとすれば、それが一方向に収斂することはありえない。なぜなら、「美」は多様であるからだ。そのため、ダーウィンの性淘汰説は、自然淘汰説と同じく、あるいはそれ以上に進化のプロセスの多様性に力点を置いた学説であると言える⁽⁴⁹⁾。

「ファッション」のなかで進化のメカニズムが働いていると考えたのは、しかし、ダーウィンだけではない。メンシングハウスは、ベンヤミンもまた『パサージュ論』のなかで同じく「ファッション (Mode)」について論じていることに注目している。人間のファッション文化には長い歴史があるが、メンシングハウスによれば、それが本格的に開花したのは、流行のファッションの大量生産と大量消費の仕組みができあがった 19 世紀のことである⁽⁵⁰⁾。ベンヤミン

⁽⁴⁸⁾ Ebd., S.78.

⁽⁴⁹⁾ このことは、ブレーデカンブも『ダーウィンの珊瑚』のなかで指摘している。「ダーウィンは、自然がつくりだした見事な装飾を、人間の進化に関する大著の第二部にあたる「性淘汰」の中心的な個所で、美の原理にもとづいて説明し、美は性淘汰の動因として、種の変化の他のあらゆる動因に勝るとした。[...] ダーウィンが樹木モデルに代わるものとして思い描いた進化のモデル [珊瑚モデル] の根拠は、この美の原理のなかにも見出される。」 Bredekamp 2005, S.77. なお、[] 内の文言は論者による補足。

⁽⁵⁰⁾ Menninghaus 2003, S.261. 「19 世紀は、最初のファッションの大世紀である。」

は、まさにこの観点から 19 世紀の文化史研究に取り組んだ先駆者であり⁽⁵¹⁾、他方でダーウィンは、ファッション文化が開花した 19 世紀において、生物学者として、いち早くファッションに内在する進化のメカニズムの解明に取り組んだ人物だった。両者の「ファッション」への関心の重なりを、メニングハウスは次のように述べている。

美的選好と、ファッションや建築という形での美的選好の客体化は、ベンヤミンによれば、従来の伝承メカニズム（宗教、家族、社会ヒエラルキー）が弱体化した時代において、最も強力な秘密の紐帯、すなわち世代間の固有のタイプの「伝統」を表している——もともと、個々のファッションの伝承可能性は、その置き換え、つまり流行遅れになるという様態でしかありえないのではあるが。この考えを推し進めると、美的「淘汰 (Wahl)」と「嗜好 (taste)」の進化が、後期資本主義の商品美学において再び——今や文化的な——進化 (Evolution) の中心的な推進力となる。ベンヤミンがこの展開の「根源」を、ダーウィンがファッション進化とい

-
- (51) メニングハウスは次のように述べている。「断章に終わったベンヤミンの『パサーージュ論』は、服飾・都市建築・室内といったファッションに注目して、19 世紀を「その夢の諸形象の帰結」として読み解くことによって、多くの帰結を導き出した最初の作品となった。」Ebd., S.264. メニングハウスの指摘を、『パサーージュ論』の「ファッション／流行 (Mode)」の章に照らして補足するならば、ベンヤミンはある断章のなかで、「ファッション」というテーマの魅力について、次のように述べている。「哲学者がファッションに熱烈な関心をそえられるのは、ファッションがとてつもなく予見的なものであるからだ。[...] 新しいシーズンが来れば、その最新の服飾のなかには来るべき事物を告げる何らかの秘密の旗印が必ず含まれている。その信号を読む術を心得ている者ならば、芸術の最新の傾向ばかりではなく、新しい法典や、戦争や革命のことまであらかじめわかってしまうことだろう。——ここにこそ、ファッションの最も大きな魅力があることは間違いない。」GS 5, S.112. ベンヤミンはファッションが未来を先取りしていることを指摘する一方で、他の断章では、それが急速に流行遅れになり、廃れゆくことも指摘している。ベンヤミンはそうした時代遅れになった過去のファッションから、19 世紀という時代の信号を読み取ることができると考えていた。ベンヤミンはまた、ダーウィンと同じく、ファッションが「セックス・アピール (sex-appeal)」の手段であることについても考察している。この点については、『パサーージュ論』断章 B 9, 1 (Ebd., S.130) を参照。

うモデルを身体の原史に投影したのと同じ時代〔19世紀〕に設定したのは、おそらく偶然ではない。⁽⁵²⁾

やや分かりにくい表現が使われているので、簡単にパラフレーズしておこう。19世紀に入り、「宗教」をはじめとするそれまでの社会の支持基盤が弱体化してくると、「美」が人々をつなぐ新しい絆となる。個々の「ファッション」は世代ごとに変化し、その都度時代遅れになっていくが、それでも人々は移ろいゆく「ファッション」という伝統を通じて、前後の世代とつながっている。メニングハウスの考えでは、ベンヤミンは「ファッション」の進化を生み出す「美的淘汰」のメカニズムが、19世紀における文化の進化の中心的な推進力であることに気づいていた。そしてダーウィンは、まさにその19世紀の同時代人として、生物の「ファッション進化」を明らかにしようとした人物だった。——ベンヤミンの『パサージュ論』の主題は多岐にわたり、必ずしも「ファッション」という一点にのみ収斂するものではないが、それでも「ファッション」が彼の大きな主題であったことは間違いない。ここから、ダーウィンとベンヤミンの第二の共通点が次のように指摘できるだろう。すなわち、ベンヤミンとダーウィンは、進化の多様性を表象する歴史認識のモデルを追い求めただけではなく、「ファッション」の歴史哲学的な考察をおこなっていた点においても、ひそかに一致しているのである。

4. おわりに——ダーウィンとベンヤミンの「自然史」

ここまで、進化論を批判したベンヤミンと進化論の提唱者であるダーウィンの思想が、歴史認識のモデル選択や「ファッション」というテーマへの関心において隠れた共通点をもっていることを、現代ドイツのダーウィン研究を手がかりにして明らかにした。以上の考察からは、ベンヤミンが模索した新たな

⁽⁵²⁾ Menninghaus 2003, S.222. なお、〔 〕内の文言は論者による補足。

「歴史」の概念は、彼が批判の矛先を向けた 19 世紀の「歴史」の概念そのもののなかに——この場合は「進化論」のなかに——ひそかに懐胎されていた、という結論を導き出すことができるだろう。とはいえ、その帰結に至る論証の過程で参照したブレイデカンブとメニングハウスの研究が、ダーウィンの進化論を過度にベンヤミンに引きつけて読んでいるという可能性も——両者がベンヤミン研究者でもあることを考慮すれば⁽⁵³⁾——否定はできない。そのため、ブレイデカンブとメニングハウスとはまた別の観点から、ダーウィンの進化論とベンヤミンの歴史研究が重なり合いながらも対照関係にあることを最後に確認して、本論文を締めくくることにしよう。注目すべきは、ダーウィンとベンヤミンにおける「自然史 (Naturgeschichte)」の理念である。

本論文の冒頭で述べたように、ダーウィンの進化論は、それまで不変のものと見なされてきた生物種の可変性の原理を明らかにしたことによって、従来の分類学的な「自然誌」(自然の記載)を、系統的な「自然史」(自然の歴史)へと書き換えた⁽⁵⁴⁾。ダーウィンの進化論が「自然 (Natur)」と「歴史 (Geschichte)」の伝統的な二項対立を覆したことについて、スーザン・バック＝モースは次のように述べている。「歴史の概念においては、時間は社会的変化や人間の出来事の特異性や不可逆性を示す。伝統的に歴史は、時が周期的反復という意味においてのみ変化する「自然」と対立する意味を帯びてきた。しかしチャールズ・ダーウィンの進化論は、自然自体が特異で、非反復的な歴史のコースを辿るのだと論じることによって、この伝統的な二項対立を覆した。」⁽⁵⁵⁾他方でベンヤミンは、ダーウィンとはまた別の角度から、自然と歴史のカテゴリーの二項対立の解消を試みていた。例えば『パサーージュ論』の初期

(53) メニングハウスとブレイデカンブは、ともに複数のベンヤミン論を書いている。以下に一例を挙げる。Menninghaus, Winfried: *Schwellenkunde. Walter Benjamins Passage des Mythos*. Frankfurt a. M. 1986; Bredekamp, Horst: *Von Walter Benjamin zu Carl Schmitt, via Thomas Hobbes*. In: *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*. 46. Berlin 1998, S.901-916.

(54) Vgl. Anm., 1.

(55) Buck = Morss 1991, S.58.

草稿のなかで、ベンヤミンは次のようなメモを残している。「一切の歴史哲学的カテゴリーは、ここで原点にまで押し戻されなければならない。自然的な実体をもたぬような歴史のカテゴリーはなく、歴史的な濾過をされないような自然的カテゴリーはない。」⁽⁵⁶⁾このベンヤミンの思考方法を、アドルノは「自然史的 (naturgeschichtlich)」という言葉で形容している。

形式としてのエッセイは、歴史的なものや客観精神の現れや「文化」を、それらがまるで自然であるように見つめる能力に依拠している。この能力にかけてベンヤミンに並び立つものはほとんどいなかった。彼の思考の全体は、「自然史的 (naturgeschichtlich)」と呼ぶことができる。化石になったもの、凍りついたもの、時代遅れになったもの、そんな文化の在庫品たちが、実家でくつろぐ生き生きとした空気を手放した文化のことごとくが、彼に向かって語りかけた。ちょうど標本室にある化石や植物が、収集家に向かって語りかけるように。風景がなかにつくりこまれていて、揺すると雪が降ってくる小さなガラス球〔スノードーム〕が、彼のお気に入りの品だった。フランス語では静物を死んだ自然というが、この言葉は彼の哲学の地下室に至る門に書かれていたら似合うだろう。人間関係が自己疎外し対象化されたものとしての第二の自然 (zweite Natur) というヘーゲルの概念や、マルクスの商品フェティシズムというカテゴリーも、ベンヤミンにおいては決定的な位置を占めている。⁽⁵⁷⁾

アドルノによれば、ベンヤミンは「歴史的なもの」をまるで「自然」のように見る優れた能力の持ち主だった。人間は自然環境のなかでのみ生きているのではなく、歴史的に構築されてきたもの、つまり「文化」という名の「第二の

⁽⁵⁶⁾ GS 5, S.1034.

⁽⁵⁷⁾ Adorno, Theodor W.: *Charakteristik Walter Benjamins*. In: Ders.: *Gesammelte Schriften*. Bd. 10. Frankfurt a. M. 2003, S.238-253, hier S.242 f. なお、[]内の文言は論者による補足。

自然（*zweite Natur*）⁽⁵⁸⁾のなかで生きている。「第二の自然」の化石を——死滅した文化の化石を——収集し、分類し、それらが語りかける言葉に耳を澄ませ⁽⁵⁹⁾、その隠れた意味を考察するベンヤミンの思考方法を、アドルノはここで「自然史的」と呼んでいる。

ベンヤミンとダーウィンは、このように、どちらも「自然」と「歴史」のカテゴリーの交差をとらえる「自然-史」家であったという点では一致している。しかし、両者の「自然史」の理念は決して同じものではない。ダーウィンが「自然」のなかに「歴史」を見ていたとすれば、ベンヤミンは「歴史」のなかに「自然」を見ていた。ダーウィンの「自然史」が、第一の自然における種の生存闘争の歴史を解明する試みであったとすれば、ベンヤミンの「自然史」は、歴史的にかたちづくられてきた第二の自然の収集と解読の試みであった。死滅した「第二の自然」の化石を前にして、ベンヤミンは、ダーウィンが問いに付すことのなかった、「自然史」の新たな問いを立てている。「死せるものの救済（*Rettung des Toten*）」⁽⁶⁰⁾はいかにして可能なのかという、新たな問いを。

——文学部准教授——

(58) 「第二の自然」という概念のベンヤミンの用法については、拙論「第二の自然としての技術——ルカーチからベンヤミンへ」[日本アイヒェンドルフ協会『あうろ〜ら』第33号、2016年、23～44頁所収]を参照。

(59) Adorno 2003, S.243.

(60) Ebd., S.252. アドルノは、「死せるものの救済」がベンヤミンの哲学の核心をなす理念であると述べている。